

[A] 大航海時代ーテキスト P34 対応ー

日本の戦国時代(安土・桃山時代を含む)にあたる 15 世紀後半から 16 世紀にかけて、ヨーロッパ諸国は、イスラム勢力に対抗するために、キリスト教の布教、海外貿易の拡大などをめざして世界に進出した。彼らはインドでとれる香辛料を求めていたんだけど、ヨーロッパからインドへ行く途中には強大なイスラム勢力のオスマン帝国がいて、地中海を制圧しているため向かうのは難しい。

それだったら、遠回りでもいいから船でインドを目指せばいい。そこで、イタリア人のコロンブスは「地球は丸いハズなんだから(当時は地球が丸いことは証明されていない)、ヨーロッパから西へとずっと向かっていけば、日本を経てインドへ到着できるではないか！(当時はアメリカ大陸の存在を知らなかった)」と主張して、1492 年にスペイン女王イサベルの援助により、大西洋を横断して北アメリカ大陸の南東のカリブ海域にある島に到着する。コロンブスは、そこに住む原住民の肌の色を見て、「ここがインドじゃ！」と言って西インド諸島と命名するんだけど、これはただのカリブ諸島の一つにすぎないので、アメリカ大陸を発見したというのは間違い。アメリカ大陸は 1503 年にアメリカゴ・ヴェスプッチによって派遣されたことから「アメリカ大陸」と名付けられるしね(本当はアメリカゴ・ヴェスプッチが第一発見者でもないんだけど、そこは置いておこう)。

まあ、結局コロンブスの唱えた西回りでインドに行こうという目標は、アメリカ大陸がその途中にあることによって不可能となる。だったら、「アフリカの南までぐるっと回ってインドに行きやええやん」と考えたポルトガル人のヴァスコ＝ダ＝ガマが、1498 年にアフリカ大陸南端の喜望峰をまわってインド西海岸のカリカットに到着することに成功したんだ(インド航路の発見)。

そして、この 2 人を中心とした航海によって、地球は丸いということがわかってきたことで、ポルトガル人のマゼランは 16 世紀初め、スペインの艦隊をひきい、アフリカ大陸南端をまわって太平洋に出てフィリピン諸島に到着し(この地でマゼランは現地の軍勢との戦いで戦死してしまうが)、その一隊はさらに西進を続けて世界周航をなしとげた。この結果、東西南北の海から多くの海賊がグラン・ドラインを目指す大海賊時代、…世界の諸地域がヨーロッパを中心に広く交流する大航海時代とよばれる時代に突入するんだ。

その先頭に立ったのが、イベリア半島の王国スペイン(イスパニア)とポルトガルだった。アメリカ大陸に植民地を広げたスペインは、16 世紀半ばには太平洋を横断して東アジアに進出し、フィリピン諸島を占領してマニラを拠点とした。一方のポルトガルは、インド西海岸のゴアを根拠地にして東アジアへ進出し、東南アジアの香料をヨーロッパにもたらして大きな利益を上げた。そして、16 世紀には中国市場への進出をはかり、倭寇を討って明から割譲された中国のマカオにも拠点を築いた。

[B] 鉄砲の伝来と南蛮貿易の開始ーテキスト P34 対応ー

こうしたスペイン(イスパニア)・ポルトガルがアジアへ進出していた最中の 1543 年に、ポルトガル人を乗せた中国船が九州南方大隅国の種子島に漂着した。どうやら嵐に巻き込まれたようで、ボロボロになった船の中からは中国人が 100 名程、さらには日本人が見たこともない奇妙な顔立ちをしたポルトガル人 2 名(3 名ともいわれる)が船から降りてきたんだけど、ここで「何で中国人が 100 名も乗っているの？」という疑問にぶち当たる。実は、この船は倭寇王と呼ばれた王直の所有する中国船で、その中にポルトガル人が紛れ込んでいただけで、ポルトガル船ではないんだ。…ここで、そろそろピンときてほしいんだけど、後期倭寇は中国人が中心で中国人 7 割・日本人 2 割・ポルトガル人 1 割程度だったでしょ？つまり、この漂着船が倭寇王と呼ばれた王直の持ち物であるように、実は後期倭寇だったんだよね。だから、中国人が 100 名程いて、その中に漂流して仲間入りしたかと考えられるポルトガル人が加わっていたにすぎないんだ。

さて、住民では対応しきれないので、島主であった種子島時堯(時堯)が直接面会してみたんだけど、そのポルトガル人が手に持っている細長い筒状っぽいものが気になってしょうがない。

種子島時堯 「お前が持っているその細長い筒状のものは何だ？」

ポルトガル人「これっすか？鉄砲っす。」

種子島時堯 「テッポウ？何じゃそりゃ？」

ポルトガル人「ご覧になってみますか？」

そのポルトガル人が手に携えている一物(ポルトガル人のイチモツだからすごそう)の長さは 2~3 尺、現在でいう 60cm~90cm(…さすがポルトガル人は大きいんだろうな)、形は中が空洞で外側はまっすぐで重かった(硬くて重みまであるとは、さすがポルトガル人だ)。時堯も気になってしょうがないから

種子島時堯 「このテッポウとやらで何ができるんだ？」

ポルトガル人「弓矢と違って殺傷力がすごいんですね。動物でも鳥でも人でも撃ち殺せますぜ？」

種子島時堯 「何だと…？試しに鳥でも撃ち落としてみよ。」

そうしたら、その威力のすごいことすごいこと(さすがはポルトガル人、威力もすごかったようだ)。すぐにこの鉄砲の凄さに気づいた時堯は

種子島時堯 「ぜひ譲ってもらえないだろうか？」

ポルトガル人「譲るのは無理ですが、売ることならできやすぜ？」

種子島時堯 「ど、どれくらいの値段だ？」

ポルトガル人「うへん、1 挺金 1000 両(現在の価値で 1 億円相当)でどうでやんす？」

種子島時堯 「クソ高いな!!!!!!」

ポルトガル人「ダメなら売らないだけでやんすけど？」

種子島時堯 「わ、わかったわ！2挺(現在の価値で 2 億円相当)買うわ!!!!!!」

ポルトガル人「…(本来の相場は 1挺80 両ぐらいなんだけどな www)」

こうして完全なボッタくられる形で種子島時堯が鉄砲を 2挺購入したことで、1543 年に日本に鉄砲が伝来することになったわけだ。なお、この鉄

く鉄砲伝来の覚え方>

「以(1)後(5)予(4)算(3)キツいよ、鉄砲伝来」

砲伝来に関する事情は文之玄昌が記録した『鉄砲記』に記されているので、以下の史料を見てもればわかるけど、上記の内容が書かれているだけだね。

炮

☐ 鉄砲の伝来『鉄砲記』by 文之玄昌

天文癸卯(1543 年)秋八月二十五日丁酉、我が西村の小浦(種子島の港)に一大船(中国船)有り、何れの国より来れるかを知らず、船客百余人、其の形類せず、其の語通せず、見る者以て奇怪と為す。……賣胡の長二人有り、一は牟良叔舎と曰ひ、一は喜利志多佐孟太と曰ふ。手に一物を携ふ。長さ二三尺。其の体為るや、中通り外は直くして、重きを以て質と為す。

……時堯(種子島時堯)其の価の高くして及び難きを言はず、而ち蛮種の二鉄砲を求め、以て家珍となす。

(天文十二年(1543 年)8 月 25 日、我が西村の入江(種子島の港)に一艘の大きな船(中国船)が漂着した。どこの国から来たかは不明である。乗客は 100 余人、その容貌・服装は日本人と異なり、その言葉は通じず、彼らを見た者は皆奇妙に思った。……外国(ポルトガル)商人の長が 2 人いた。1 人はフランシスコ・ゼイモトといい、1 人はキリシタとアントニオ・ダ・モタといった(2 人の名前が混同されており、ポルトガル商人は 3 人いたとも考えられる)。手にある物を携えていた。その物の長さは 2~3 尺で、形は中が空洞、外側はまっすぐで、大変重いという特質があった。

……種子島の島主種子島時堯はその値段がとても高いにもかかわらず問題とせず、南蛮の鉄砲を 2 挺買い求めて家宝とした。)

ただ、このボッタクリ価格の鉄砲を毎回購入するのはさすがにキツイ。そこで、家臣にその使用法と製造法を学ばせて(鉄砲の製造を命じられた鍛冶師の八坂金兵衛は自分の娘若狭をポルトガル人に差し出して、その製造法を教えてもらった)、種子島銃と呼ばれる国産の鉄砲が生産されることになるんだ(ただし、鉄砲に必要な火薬の原料である硝石は日本では手に入らなかったのも、ヨーロッパ人との貿易でしか手に入れるしかなかった)。

これによって鉄砲の国内生産が可能となり、各地に伝えられるとすぐに和泉国の堺や紀伊国の根来・雑賀、近江国の国友(村)などで大量生産されるようになる(この大量生産を可能にしたのは、当時の製鉄技術や鑄造技術の水準の高さであった)。そして、伝来からわずか7年後には畿内で鉄砲を使用した戦闘が行われて、十数年後には全国的に大量の鉄砲が普及していった。

新鋭武器として戦国大名のあいだに鉄砲は急速に普及すれば、戦術も一変するよね。今までは騎馬戦を中心とする戦法だったけど、いくら強い武将であろうが鉄砲をもった雑兵の足軽鉄砲隊による集団戦法を食らったらイチコロだ。その典型例として知られているのが、1575年の織田信長と徳川家康の連合軍が3000挺の足軽鉄砲隊を用いて、戦国最強とうたわれた武田勝頼(武田信玄の子)の騎馬隊を撃破した長篠の戦いだ(詳細はテキスト P35 参照)。

篠

＜長篠の戦いにおける鉄砲の「三段撃ち」戦法は創作？(入試には出ない話)＞

そして、織田信長・徳川家康の連合軍が鉄砲の「三段撃ち」の新戦法で、武田勝頼の騎馬軍団に圧勝した話で有名なのが長篠の戦い。ただ。この時代における鉄砲のメリットは、遠距離から攻撃できることと殺傷能力が高いこと(鉄砲の有効射程距離は200メートル程だったが、命中精度が低いため100メートル程の距離から撃たなければ殺傷能力はほぼ無かった)。一方でデメリットもあり、まず雨の日には火縄が付かないため使えないこと、さらには連射ができないことだった。1発目を撃った後には、鉄砲の整備や火薬・弾丸の補填、火縄への点火の作業があるため、2発目を撃つまでに30秒ほどかかってしまうので、その間に突撃されたら成す術がなかったわけだ。

そこで、長篠の戦いでは武田軍の騎馬隊を防ぐために空堀や土塁を築き、さらに木材で作らせた馬防柵(敵が自陣を通過することを防ぐための柵)を並べておき、その内側から狙撃する方法がとられた。これは、武田の騎馬隊の通過を防ぐだけでなく、騎馬隊を怖れて弱腰であるかのように見せることで、鉄砲の射程距離まで武田軍の突撃を誘い込む狙いもあったんだ。そして、「3000挺の足軽鉄砲隊を1000人ずつ3列に布陣させて、1列目の部隊が射撃したら3列目まで下がって次の発砲の準備をする。そして、2列目の部隊が前に出て射撃をしたら、次は3列目の部隊が射撃をして、その間に後ろで準備をしていた1列目がまた射撃する。」という「三段撃ち」の新戦法がとられたそう。

でも、3人の狙撃手が入れ替わって移動するならば、場所を交代するスペースが必要なのに、長篠の戦いの舞台となった設楽原は狭い土地で、鉄砲隊を広く布陣させる余裕はない。さらに、信長の発言を逐一メモっていた太田牛一が著した信憑性の高い『信長公記』には、長篠の戦いにおける「三段撃ち」に関する記述は一切なく、江戸時代初期に小瀬甫庵が著した信憑性の低い『信長記』にしか記されていないため、現在では「三段撃ち」は後世の創作であるとされている。

そこで、3人組か4人組で1つの隊を組ませて、最も命中率の高い1名を狙撃手として専念させ、残り2名or3名が分業して鉄砲の整備と火薬・弾丸の補填を行い、発射準備が完了した鉄砲を次々射撃手に手渡したのではないかという説が提唱されたんだけど、そもそも長篠の戦い後に信長は三段撃ちの戦術を使用していないから、それも無理があると思うのよね…。

また、鉄砲伝来によって築城法の変化もしていく。防御施設としての城の構造は、これまでは山頂に築く山城が多かったけど、これは守備側にとって上方から弓矢などで攻撃をしやすかったから。でも、鉄砲が普及すれば下方からもズドンと撃たれちゃうので、丘などに築かれる平山城へ、さらに平和な時代になっていくと大名の領国経営のため平野に築かれる平城へと変化していったんだ。戦争もなくなれば、いちいち丘の上まで登城するのも大変だしね。

このポルトガル人が初めて来航した 1543 年以後、彼らは毎年のように九州の諸港に来航して日本と貿易を行うようになるんだけど、かなり遅れてスペイン(イスパニア)も **1584 年**に肥前の平戸(長崎県北部に位置する松浦氏の城下町)に来航して、日本との貿易を開始することになる(この当時のスペイン国王は「太陽の沈まない国」と呼ばれたスペイン帝国の黄金期を築いたフェリペ 2 世だが、J 智大学の受験予定がなければ無視していい)。

＜スペイン(イスパニア)来航の覚え方＞

「スペイ(1)ン語(5)は(8)四(4)十年」

※スペイン船は 40 年後の 1624 年に来航を禁止されるので、合わせて覚えられる

そして、当時の日本では、ポルトガル人やスペイン(イスパニア)人を南蛮人と呼んだので、彼らとの貿易を南蛮貿易という(日本との貿易は先に来航していたポルトガルが有利に進めた)。こうした貿易における主な貿易港は、肥前松浦氏の平戸、太村氏の長崎、豊後太友氏の府内(現在の大分市)、薩摩島津氏の鹿児島などで、京都・堺・博多などの商人も貿易に多く参加した。

＜南蛮貿易の貿易港の覚え方＞

「鹿児島で暇なオウムが船で嘔吐」

→ 鹿児島(鹿児島・島津)・

ひ(平戸)ま(松浦)・

な(長崎)オウム(大村)

船(府内)・嘔吐(大友)

そして、ポルトガル人からは中国産の生糸・絹織物や鉄砲・火薬・砂糖・薬品などを輸入して、日本からは 16 世紀中ごろから飛躍的に生産が増大した日本の銀や、従来からの硫黄や刀剣などが輸出されたんだけど、この輸出入の品目を見てみると何かに似ていないかな？輸入品の鉄砲伝来による鉄砲・火薬を除いて、輸出品の銀を銅に置き換えてみると日明貿易の輸出入品にそっくりだよな。それもそのはず、南蛮貿易は日本と中国・南方の東南アジアとの中継貿易の形態をとっていたからだ。

貿易	輸出品	輸入品
日明貿易	<u>銅</u> ・ <u>硫黄</u> ・ <u>刀剣</u>	<u>生糸</u> ・ <u>絹織物</u> ・ <u>明銭</u> (<u>洪武通宝</u> ・ <u>永楽通宝</u> ・ <u>宣徳通宝</u>)・砂糖・薬品
南蛮貿易	<u>銀</u> ・ <u>硫黄</u> ・ <u>刀剣</u>	<u>中国産生糸</u> ・ <u>絹織物</u> ・ <u>鉄砲</u> ・ <u>火薬</u> (火薬の原料は <u>硝石</u>)・砂糖・薬品

当時の東アジア地域では明が未だに海禁政策(中国版の鎖国政策)を続けていて私貿易を禁止していたため、室町幕府の権威が失墜してからは守護大名に貿易の実権が移り、寧波の乱(1523)後は大内氏が日明貿易を独占していた。でも、**1551 年**に大内義隆が家臣の陶晴賢に謀反を起こされ大内氏が滅亡したため、日明貿易は途絶えてしまい、日本側は中国産の上質の生糸を輸入するルートを手を失ってしまった。そこに登場したのが南蛮国(ポルトガル・イスパニア)で、彼らは密貿易を行う形で中国から輸入した中国産の生糸などを少し高値で日本に売却し、日本から輸入した硫黄・刀剣などを少し高値で中国に売却する中継ぎ形式の中継貿易を行ったため、日明貿易の延長線上にあたる南蛮貿易は日明貿易の輸出入品はほぼ同じだったわけだ(中国産の生糸なんて日明貿易そのものだよな)。でも、この中継貿易ってどこかで聞いたことがないかな？この中継貿易は、日本・中国・朝鮮・東南アジアの中間地点に位置する琉球王国が十八番としていたもの(テキスト P29 参照)。でも、この南蛮国が中継貿易に参入してきたせいで、琉球王国の中継貿易はその後衰退していつてしまうんだ。

なお、日明貿易における輸出品の銅が、南蛮貿易における輸出品では銀に変わった背景には、博多商人の神谷寿積が朝鮮から伝えた灰吹法という金銀の精錬技術がある。今までの金・銀の採掘方法は、石の中に金・銀が紛れ込んでいる金鉱石・銀鉱石からハンマーで砕いて取り出す原始的なやり方だった。でも、この灰吹法では灰の中に金鉱石・銀鉱石を入れて燃やすと、灰と金・銀が化学反応で結びつくので、そこから金・銀を選り分ける画期的な方法だった(文系には難しいだろうなあ…笑)。まあ、とりあえずこの灰吹法の伝来によって、戦国時代には金・銀の採掘量は飛躍的にアップして、石見国の大森銀山や但馬国の生野銀山などの戦国大名による鉱山開発ブームが起こることになるんだ。



[灰吹法]

[C] キリスト教の伝来ーテキスト P34 対応ー

まず、キリスト教といっても、日本の大学においても上智大学・南山大学(愛知県)に代表されるカトリック(旧教)系、青山学院大学・関西学院大学・同志社大学に代表されるプロテスタント(新教)系、立教大学に代表される聖公会といったように、いくつもの教派に分かれている(上智大学に二重取り消し線がついているのは決して意図的なものではありません)。そして、この安土・桃山時代に来航したポルトガル・スペイン(イスパニア)両国がカトリック(旧教)の国であるのに対して、のちに江戸時代にやってくるイギリス・オランダ(1581年にスペインから独立)の両国はプロテスタント(新教)の国であるということは知っておいてほしい(詳しくは後述する)。

この当時、ヨーロッパでは宗教改革によるプロテスタント(新教)の動きが活発であり、ポルトガル・スペイン(イスパニア)両国が信仰するカトリック(旧教)は押され気味だった。そこで、プロテスタント(新教)に対抗して、カトリック(旧教)は挽回をはかってアジアでの布教に力を入れて、カトリック(旧教)の発展と布教をはかるために修道会(カトリック教会に認可された団体)を設立していった。その中で1534年にスペイン人のフランシスコ＝ザビエルらが結成したイエズス会もその修道会の一つにあたる(イエズス会は日本では耶蘇会と呼ばれた)。ゆえに、ポルトガル・スペイン(イスパニア)両国は南蛮貿易だけでなく、アジアでのキリスト教布教にも力を入れていったわけだ。



[ザビエル]

そして、インドのゴアでサンタフェー・パウロという洗礼名をもつ日本人アンジロー(ヤジロウ)に出会ったイエズス会の宣教師フランシスコ＝ザビエルは、日本での布教をころざして1549年に島津貴久の城下町鹿児島に來日し、はじめてキリスト教を伝えることになるんだ(日本では、キリスト教を吉利支丹(切支丹)・宗・天主教・耶蘇教などと呼んだ)。

「<キリスト教伝来の覚え方>
「以(1)後(5)よ(4)く(9)伝わるキリスト教」

☐ キリスト教の伝来『耶蘇会士日本通信』by ガスパル＝ヴィレラ

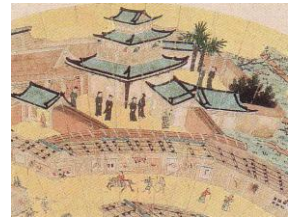
一五四九年八月、聖母の祭日、サンタ・フェーのパウロの故国なる鹿児島に着きたり(フランシスコザビエルの鹿児島到着)。彼の親戚その他は大なる愛情を示して我等を迎へたり。……日本に付きては我等が見聞して知り得たる所を左に述べべし。

(1549年聖母マリア昇天日である(太陽暦の)8月15日、サンタ＝フェーのパウロ(ザビエルを案内した日本人アンジロー(ヤジロウ)の洗礼名)の故郷である鹿児島に(フランシスコザビエル)が到着した。……日本について我等イエズス会宣教師が見聞して知り得たことを次に述べる。

サビエルは島津貴久からキリスト教布教の許可を得て、領内で布教を試みたものの結局1年間で獲得できた信者数は100名程度。そこで、「そうデス、京都へ行くデ～ス！日本国王から許可をもらえば全国で布教できると思うンデ～ス」ってことで、天皇か將軍から日本でもキリスト教の布教許可を得るため京都に赴いたんだけど、当時の京都は荒廃していて結局天皇にも將軍にも会えずじまい。「それなら、西の京都 or 小京都と呼ばれている山口はどうです？大名の大内義隆は文化大好き人間としても知られていますよ。」と提案されたので、長門・周防(現在の山口県)など7国を支配する戦国大名大内義隆のもとを訪れてみた。そして、望遠鏡・置時計・眼鏡などの珍しい文物を献上したら、大内義隆は大喜び。キリスト教の布教を認め、さらには日本で最初の南蛮寺(荒廃した古寺を利用した教会堂)として太道寺の建設まで許可してくれたんだ。その後は、キリスト教に関心を示していた豊後(現在の大分県)の大友義鎮(大友宗麟)からのオファーを受けて豊後に赴き、大内義隆・大伴義鎮らの保護のもと西国で布教活動をしたのち2年ほどで日本を去っていくんだ。

1549年にザビエルがキリスト教の布教を開始したことを契機に、その後キリスト教宣教師が相次いで来日してくる。そのキリスト教宣教師たちの賢かったところは、布教のためには日本の習慣や生活様式に従うことが重要であると考えて、日本語や日本文化を熱心に研究したこと。

例えば、新たに造られたキリスト教の教会堂にあたる南蛮寺も従来の仏教寺院を改造したものが多く、日本の建築様式を重視して木像・瓦葺で造られている(写真は1576年に京都に建設された南蛮寺)。まあ、普通に教会堂を建てたら、仏教徒とかに焼き打ちされちゃう可能性もあったしね。



〔京都南蛮寺〕

こうしたキリスト教のイエズス会宣教師として、1556年に来日した人物がガスパル＝ヴィレラ。なお、僕はガスパル＝ピレラでもいいと思うんだけど、国語審議会ってアホな組織が「外国人の表記はできるだけ外国語に近い表記にしましょう。」とか主張したせいで、ガスパル＝ヴィレラの正しい表記は「Gaspar Vilela」だから、「Vi」は「ビ」じゃなくて「ヴィ」になっているのよね(アホサ)。だったら、フランシスコ＝ザビエルの正しい表記は「Francisco Xavier」なんだから、「Xavier」も「ザビエル」じゃなくて「シャヴィエル」に変えろよ？と思うんですがね(激おこです)。

さて、そのガスパル＝ヴィレラは13代將軍足利義輝から布教の許可をもらって京都・奈良・堺などで布教を行ったんだけど、自由都市(自治都市)として会合衆と呼ばれる36人の豪商を中心に、商人たちによる自治が行われていた堺にやってきたらめっちゃくちゃ驚いた(授業解説[中世社会経済史]を参照)。「この町やばいデ～ス！戦国大名の侵攻を防ぐために、町のまわりを堀で囲んだり、門には門番を置いたり、傭兵を雇って撃退したりして、商人たちで自ら町を運営しているデース！これはイタリアの水上都市で『ヴェネスの商人』でも有名なベニス(ヴェネス)みたいデ～ス！(英語だとヴェネス、イタリアだとヴェネチアと発音する)」と衝撃を受けて、その堺の様子を『耶穌会士日本通信』(イエズス会(耶穌会)の会士(宣教師のこと)が日本で布教を行った活動状況をまとめた報告書)という書簡(手紙)で本国に報告している。

図 堺の発展『耶穌会士日本通信』by ガスパル＝ヴィレラ

＜ガスパル＝ヴィレラの1561年の書簡＞

堺の町は甚だ広大にして大なる商人多数あり。此町(堺)はベニス市の如く執政官(36人の会合衆)に依りて治めらる。……

＜ガスパル＝ヴィレラの1562年の書簡＞

日本全国、当堺の町より安全なる所なく、他の諸国に於て動乱あるも、此の町には嘗て無く、敗者も勝者も、此の町に来往すれば皆平和に生活し、諸人相合し、他人に害を加ふる者なし。……(中略)……町は甚だ堅固にして、西方は海を以て、又他の側は深き堀を以て囲まれ、常に水充滿せり。

＜ガスパル＝ヴィレラの1561年の書簡(現代語訳)＞

(堺の町は非常に広大で、大商人が多数いる。この町(堺)はベニス市(北イタリアの代表的自治都市のヴェネチア)と同じように執政官(堺の町を合議制で指導した36人の会合衆)によって治められている。……

＜ガスパル＝ヴィレラの1562年の書簡(現代語訳)＞

(日本国中でこの堺の町より安全な所はない。他の諸国では動乱があっても、この町にはかつて無く、敗者も勝者も、この町に来往すれば、皆平和に生活し、人々が仲良くし、他人に害を加える者もない。……(中略)……町は非常に堅固であり、西方は海(大阪湾)で、また他方は深い堀で囲まれ、常に水が充滿している。

なお、テキストの付録として配布したプリントには「1561年の書簡」だけが掲載されているけど、プリントには載っていない「1562年の書簡」にも目を通しておいてもらいたい。結局は「堺」という都市名が問われるだけだけど、「1562年の書簡」の方を出題してくることもあるのでね。

また、1563 年に来日したルイス＝フロイスは織田信長に謁見してキリスト教布教の許可を得ることに成功している。また、1597 年に長崎で亡くなるまで日本に滞在して、ザビエルが来日した 1549 年～1593 年までのイエズス会の日本での布教活動史として『日本史』を著しており、そこには織田信長・豊臣秀吉らの性格・動向、庶民生活などについても詳細に記されているんだ。

—<ルイス＝フロイスが織田信長に謁見した際(1569)のエピソード>—

1569 年に謁見を許されたルイス＝フロイスは、織田信長についての最初の印象を『耶蘇会士日本通信』で「此の尾張の王(織田信長のこと)は、年齢三十七歳なるべく、長身瘦軀(背が高く痩せている)、髯少し、声は甚だ高く、非常に武技を好み、粗野なり。」と評している。だから、大河ドラマで信長を演じる場合は「出陣じゃあゝゝ」って甲高く言うべきだと思うんだよね(笑)。なお、余談だが通常授業ではこの信長の声マネをを鉄板ネタとしてやっていたんだけど、受験が終わった生徒から「先生、的中しました!」と報告がきた。「何のこと??」と尋ねたら、「信長の声は[高い or 低い or 太い or 細い]って問題が出たんですよ! もちろん[高い]を選びました! 的中ですね!」と喜ばれた。…もちろん的中を狙ったつもりはないんだけど、恐る恐る「どこで出題されたの?」と聞いたら「〇〇大学です!」と返ってきた(大学の名誉のために伏せておきます)。さすがは最「上」の叡「智(sophia)」を学生に与えることを目指している大学でありますなあ……(鼻ホジホジ)。

さて、話を戻そう。そのフロイスが謁見した際には織田信長に時計や地球儀などを献上している。信長は「ん～、時計ってのは便利そうだけど、使い方もようわからんし、壊れたら修理できんだろうからいらんわ。でも、この地球儀ってのは何なん?」と尋ねてきたので、フロイスは「地球はこんな感じで丸いんデス。だから、我々もヨーロッパという遠いところから船でここまで来られたわけデース。」と答えた。そうしたら、羽柴秀吉(豊臣秀吉)を含めたまわりの家臣たちは理解できなかったんだけど、信長は「なるほど! それなら、確かに地球が丸いってのは理に適っているな。ほんじゃ、この地球儀はもらっておくわ。」と日本で初めて地球が丸いことを理解した人物とされている。

さて、このルイス＝フロイスを助けるため 1570 年に来日したのがオルガンティノなんだけど、1576 年にフロイスは九州に転任してしまうので、その後オルガンティノが織田信長の厚い信任を受けることになる。そして、1576 年に京都に南蛮寺(教会堂)、1580 年に安土にセミナリオを建設するなど畿内での布教につとめたんだ。なお、このように織田信長がキリスト教を保護して布教を許可したのには、比叡山延暦寺や浄土真宗信者による一向一揆などの仏教勢力に対抗するためという目的があった。

そして、こうした宣教師がちゃんと活動しているか、巡察使というかなりお偉いさんの立場として 1579 年に来日したのが、イエズス会の日本布教の責任者であったヴァリニャーニ(バリニャーノ)だ。彼は日本でキリスト教をさらに広げるためには日本人の宣教師も育てていく必要があると考えて、7～17 歳のキリシタンの子供などを対象とした初等教育を施す神学校としてセミナリオ(肥前有馬・近江安土に設立される)、日本人宣教師を養成するための高等教育を施す宣教師の養成学校としてコレジオ(豊後府内に設立される)といったキリスト教教育施設の設立を指示したり、病院を建てて医療活動をしたり社会事業なども行って布教につとめたため、キリスト教は九州・畿内を中心に急速に広まっていった(こうしたセミナリオとコレジオの中間に位置する修練院としてノビシャドも豊後臼杵に設置され、そこからコレジオに入学する者もいたので、最終的には「セミナリオ」→「ノビシャド」→「コレジオ」の 3 段階制がとられた)。あとは、1582 年にキリシタン大名 3 名が派遣する天正遣欧使節を勧めたり、1590 年に帰国した際に活字印刷機を伝えたりしているんだけど、それは後述しよう。

—<セミナリオ・コレジオの覚え方>—

「セミナリオ(seminario)＝ポルトガル語」

※英語の seminar(セミナー・ゼミナール)

「コレジオ(collegio)＝ポルトガル語」

※英語の college(大学)

→セミナー(セミナリオ)で初等教育、

カレッジ(コレジオ)で高等教育を学ぶ

安土・桃山時代に来航したポルトガル・スペイン(イスパニア)の両国はカトリック(旧教)の国であったため、南蛮貿易はキリスト教宣教師の布教活動と一体化して行われており、ポルトガル・イスパニアの貿易船は、キリスト教の布教を認めた大名の領地にしか入港しなかった。

そして、当時の日本では鉄砲に使用する火薬の原料である硝石が生産できなかったため、戦国大名が硝石を手に入れる方法は南蛮貿易しかなかった。それを利用してポルトガル・イスパニア両国は、「南蛮貿易をしたいのであれば、キリスト教の布教を許可してください。キリスト教の布教を認めない地域とは貿易しません」というキリスト教の布教と南蛮貿易をワンセットにして切り離せない方針をとった。これが最初に出てきた南蛮貿易がキリスト教の布教と一体化しているという意味なんだ。

＜オランダ・イギリスの来航(テキスト P42 の概説)＞

カトリック(旧教)の国のポルトガル・スペインに対して、江戸時代に来航したオランダ・イギリスの両国はプロテスタント(新教)の国であり、「貿易だけしたいのならば貿易だけでいいですよ。うちにはキリスト教の布教はしませんから。」とキリスト教の布教と南蛮貿易を切り離すことができ、貿易だけでOKという国だった。そのため、オランダ・イギリスの貿易方針を知った徳川家康は大喜びして、平戸にオランダ商館・イギリス商館を設けてあげて来航を歓迎したんだ。ただ、オランダとの貿易競争に敗れたイギリスは1623年に撤退してしまったので、じゃあ残ったオランダとの貿易を進めていけばいい。そして、キリスト教と関係するカトリック(旧教)の国のスペイン船(イスパニア船)の来航を1624年に禁止して、さらに1639年にはポルトガル船の来航も禁止して、オランダとの貿易を幕府アが独占していくことになるんだ。

上記のように、戦国大名が南蛮貿易を行うにはキリスト教の布教を認めなければならなかった。そのため、貿易をすることを望んだ大名たちは宣教師の布教活動を保護し、こうしたキリスト教の布教を認めた大名の中には自ら洗礼を受けてキリシタン大名と呼ばれる者もいたんだ。その中でもヤバめなのが大友義鎮(宗麟)で、自らの洗礼名フランシスコ(Francisco)を略して「FRCO」という花押(印章)まで作っちゃっているし、大村純忠なんかは領内の寺社を破壊したり、領内の領民にキリスト教への改宗を強制したり、1580年には自分の領地である長崎をイエズス会に寄進してしまっている(なお、大村純忠の甥にあたるのが有馬晴信)。つまり、長崎が日本領ではなくなってしまうということなので、このことが後に豊臣秀吉の逆鱗に触れて1587年に伴天連(宣教師)追放令が発布されることになるんだけどね。

＜代表的なキリシタン大名＞

大友義鎮(宗麟)(洗礼名＝フランシスコ)

大村純忠(洗礼名＝バルトロメオ)

有馬晴信(洗礼名＝ジョン＝プロタジオ)

高山右近(洗礼名＝ジュスト)

小西行長(洗礼名＝アゴスチノ)

黒田孝高(如水)(洗礼名＝シメオン)



〔大友義鎮花押(左)〕

そして、このキリスト教にドはまりしている九州地方の大友義鎮(宗麟)・大村純忠・有馬晴信に対して、「それほど信心深いのであれば、キリスト教の本場であるローマ教皇に会いに行こうツアーに参加しませんか～」という勧めたのがイエズス会巡察使のヴァリニャーニ(バリニャーノ)。それに従って3大名が1582年に(1582年の本能寺の変と同年)、天正遣欧使節と呼ばれる正使伊東マンショ・キタ右ミゲルと副使中浦ジュリアン・原マルチノの少年4人をローマ教皇のもとに派遣するんだ。そして、彼らはインドのゴア・ポルトガルの首都リスボンを経てローマに到着し、教皇グレゴリウス13世(現在も使用されているグレゴリオ暦を導入した人物として有名)に会って、ヴァリニャーニと共に1590年に帰国してくる。そのヴァリニャーニが帰国(再来日)した際に活字印刷機の輸入に尽力したんだ(活字印刷とは「A」・「B」・「C」・「D」などの文字が1字ずつ凸状に刻んである「活字」という版のことで、それを組み並べることで文字を印刷する技術)。



〔天正遣欧使節〕